



Title	モノを動作の対象とする「てあげてください」に関する先行研究と問題点の整理
Author(s)	数納, 風香
Citation	言語科学研究, 1, 18-28
Issue Date	2024-03-29
DOI	10.14943/110400
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/91821
Type	article
File Information	1_03-KAZUNO.pdf



[Instructions for use](#)

モノを動作の対象とする「てあげてください」に関する 先行研究と問題点の整理

数納 風香

1. はじめに

本稿は授受補助動詞「てあげる」のうち、主にデモンストレーションの場面において使用される「てあげてください」という用法に着目し、このような表現に関する先行研究をまとめるものである。

以下のような用法に現れる「てあげる」は、一見授受の関係が不明瞭である。

- (1) 鶏肉は、皮目にしっかり焼き色をつけてあげましょう。
- (2) 下地を丁寧に塗ってあげると、チークの発色が良くなりますよ。
- (3) ボブはいろんな方向からドライヤーをしてあげてください。

これらの文において「てあげる」動作の対象となるのは鶏肉や髪といったモノであり、焼かれる、乾かされることによってこれらのモノがどのように受益するかが読み取れない。後述するように、違和感のある日本語表現としてしばしば取り上げられているのは、この授受関係が不明瞭であるという点が大きな理由だろう。

このような「てあげる」を用いた表現については、1990年代からさまざまな先行研究がみられる。まず第2節では、先行研究では「動作主＝聞き手」の場合における説明が不十分であることを指摘し、その場合の使用による効果を説明するにあたり、明確な行為指示表現である「てあげてください」の形を中心に扱うものとして道筋を立てる。続く第3節では、具体的な先行研究を取り上げ、有用な記述を振り返るとともに、さらに説明を加えられるであろう点を指摘する。第4節では話し手と聞き手の関係に注目することで、「てあげてください」の使用動機と使用による効果の説明を試みる。説明にあたり、Brown & Levinson (以下 B & L) (1987) のポライトネス理論と、B & L が利用した Goffman (1967) の儀礼に関する概念のうち、ポライトネス理論に引き継がれなかった「品行」(demeanor) 概念の必要性についても言及する。最後に、第5節では本稿における主張をまとめ、今後の展望を示す。

2. 取り扱う対象について

上で挙げたものに加えて、以下にさらに例を挙げる¹。

- (4) 前髪はゆるめに巻いてあげてください。(美容室、美容師が客に対して)
- (5) 味が薄ければ醤油を足してあげてください。(料理番組、料理人が視聴者に対して)

¹ 本稿における例文は、引用元が示されていない場合、筆者による作例である。その際には筆者が料理番組、美容室、服屋、化粧品売り場、SNS などで見聞きした実際の発話を参考にした。

(6) 乳液を顔全体に馴染ませてあげてください。(化粧品売り場、店員が客に対して)

これらと似た用法として、行為指示「てください」が使用されていない以下のようなものがある。

(7) 大根は千切りにしてあげます。(料理番組の料理人)

(8) アイシャドウは筆でほかしてあげます。(メイク動画のメイクアップアーティスト)

(3)~(6) と (1)、(2)、(7)、(8) は動作主が誰かという点に違いがある。(1)~(6) が聞き手を動作主とするのに対して、(7)、(8) は話し手が動作主である。また、(1)、(2) の場合は動作主がやや不明瞭である。デモンストレーションの場面で使用されることから、話し手の動作のようにもとれるかもしれないが、その後に聞き手に対して行為を勧める表現が続くことから、ここでは(3)~(6) と同様に聞き手の動作について述べるものと解釈する。なお、(2) については「あげると、~ます」という形であり、動作による効果の説明が後続している。指示した行為がなぜ指示するに値するものなのかを述べることで行為指示の妥当性を強調するはたらきをすると考えられる。

従来の先行研究では、動作主が誰であるかという点あまり重視されてこなかった。そのため、両者を区別せずに「てあげる」の機能が分析され、後述のように「話し手が自身の丁寧さを表すもの」とひとまとめに扱われてきたようである。しかし動作主が誰であるかによって、話し手がどのような動機からこの表現を用いているのか、また実際にどのような効果が生じているかは変動する。そのため両者は区別して扱うべきである。

このことを踏まえた上で、本稿では、聞き手への行為指示表現であることが明確な「てあげてください」を中心に扱うこととし、先行研究を整理していく²。この表現が用いられるのは、口語的表現に限られる。電化製品の説明書などでも使用例を発見することができたが、口語的な文体を使用した文章であった。そのため、上記の例のようなモノを受益者とする「てあげてください」の用法は、現時点では「てあげる」の使用例の中での逸脱的な用法であると言えるだろう。

この「てあげてください」が使用される場面における話し手と聞き手の性質については、対面している店員と客、という関係性がまず挙げられる。また、料理番組や園芸番組の専門家と視聴者のように、直接対面していないケースも想定できる。ここには、山本(2003)が指摘するように、知識や技術において専門性が高い話し手と、相対的に専門性が低い聞き手、という構造がある。専門性が高い話し手が専門性の低い聞き手に配慮したい、という場面で使用されると考えられるが、そのような場面はかなり限定される。たとえば、教員と生徒、のような関係性で使われることは想定しづらい。専門的知識・技能を有する話し手(教師)と想定的に専門性に劣る聞き手(生徒)という関係や、デモンストレーション(授業)という場面は上記の条件に合致する一方で、教師は生徒に特に強い配慮をしなければいけないわけではないからである³。

² 筆者の周囲では、60代以上ではそもそも本稿で取り上げているような「てあげる」の用法を聞いたことがないというケースもあり、特に男性にその傾向が強かった。一方、筆者と同年代の20代では、男女問わず、自身が使うかどうかは別として聞いたことはある場合がほとんどだった。容認度や使用実態をデータとして明らかにするにはより詳細な調査が必要だが、その点については別稿を要する。

³ 数学など特定の分野では「代入してやる」のような言い方がしばしば使用される。NHK放送文化研究所(2012)では1952年に電子計算機に関する論文で使用されている例が示されており、状況が好転することにクローズアップしたものとすれば「お肉によくたれをもみこんであげます」のようなものと

3. 先行研究の整理

3. 1 「てあげる」の概要

授受補助動詞の研究は、古くから盛んに行われている。日本語の授受補助動詞は「てやる」系（てやる、てあげる、てさしあげる）、「てくれる」系（てくれる、てくださる）、「てもらう系（てもらう、ていただく）の3種類に大別され、モノのやりもらいを表す本動詞に対して利益（benefit）の授受を示すことから、ベネファクティブ（benefactive）とも呼ばれる。このうち「てあげる」は、もとは「てやる」の謙譲語として用いられていたものの、敬意漸減により対上位者への使用が制限されるようになり、近年は非上位者やモノに対しての使用が増加しているとされる（滝浦 2020）。授受補助動詞は「てみる」（本動詞は見る）、「ておく」（本動詞は置く）などの他の補助動詞に比べ、本動詞の持っている構造を保持している傾向があり、これは使役や受身の助動詞に近い側面がある。

「てあげる」は本来話し手から相手に対する恩恵の授与を表すものである。そのため、頼もしさや親近感を示す一方、恩着せがましさを与えることがある（山本 2003）。そのような作用を持つことから、対面の上位者に対しての使用は現在ほぼできず、非上位者やモノ、あるいは対面していない第三者などに対する使用が一般的だと考えられる。

「てやる」「てあげる」は、「弟に本を読んであげる」のように相手への恩恵が示されているものが最も一般的な使用だろう。この恩恵性の表示を皮肉として使用した「地獄送りにしてやる」のような用法もある。現代日本語における「(て) あげる」は「(て) やる」の美化語的表現（菊地 1996、滝浦 2020 など）であり、「(て) やる」の粗雑な印象を避ける、もしくは自身の発話を丁寧に表示するために用いられるものとされる。

3. 2 「てあげる」の歴史的経緯

ここで「(て) あげる」の歴史的経緯についての研究に触れておく。前田（2001）によれば、「あげる（あぐ）」は「あがる」に対応する語で、実際に物を上方に挙げる意であったが、空間的な上方だけでなく身分的な上方である相手に物を献上する意で使用されたことが、授与動詞としての「あげる」成立の契機である。また、荻野（2020）によれば、17世紀前半ごろの「あげる」は「上位者の許へ物を移動させる、献上用法が主（中略）であり、その意味で移動動詞の特徴を持っていた」とされる。その後18世紀前半から、与え手が自分の意思で所有権の移動を決定する、献上とは異なる用法の「あげる」の使用が見られるようになる。それと同時に話し手の意思を表すテ形「てあげる」も普及し始めた。これにより、物理的移動を伴わない恩恵の授与が表されるようになり、「あげる」が移動動詞から授与動詞化した可能性があるというのが荻野の分析である。授受表現は動作の方向を表示する。これは所有権や恩恵の移動を表すためである。したがって、授与動詞化した「あげる」は、かつての移動動詞としての性質も引き継いでいると言える。授受表現が持つ動作の方向表示機能は、本稿で取り上げる逸脱的な「てあげる」の用法の分析、及びその他の授受表現を使用した待遇表現の使用動機と効果を考えるにあたり、注目すべき点となる。

も共通の機能があると分析されている。本稿においては、数学などの分野で使用される「てやる」は業界用語のような性質があると考える立場から「てあげる」とひとまとめにすることを避け、分析の対象外とする。

3.3 本稿で扱う「てあげる」についての先行研究

滝浦 (2020) は、「てやる」に「てあげる」「てさしあげる」の2つの敬語系があることを「“与える利益”をポライトに言うことの(とりわけ現代における)厄介さを反映している」と指摘する。滝浦の分析によれば、「てあげる」には明治～昭和前半まで敬語(謙讓語)的な意味合いがあったが、現代では敬意漸減によって対上位者への使用が難しい。モノを対象として用いられる場合について、滝浦は「敬意漸減のプロセスが終盤にかかっていることを窺わせる」と述べる。また、椎名・滝浦 (2021:217-218) では、「敬意漸減を起こした後の「てあげる」はもはや対上位者的な敬語ではないため、尊大化を起こして使いにくくなった「てやる」のいわば受け皿として、(具体的な敬意の対象者を持たない)美化語動詞と呼ぶべき性格のものになっている⁴」と述べられている。関連して、以下のような例文が「てあげる」の対モノ用法の例として挙げられている。

(9) ピザ生地はやさしくのばしてあげます

(椎名・滝浦 2021:217)

椎名・滝浦の分析に即して考えると、この文の「てあげる」に敬意の対象はなく、「てあげる」行為の対象は「ピザ」というモノである、ということになる。椎名・滝浦は「てやる」「てあげる」を、主語が与え手(動作主)かつ移動方向が遠心的なベネファクティブであるとするが、話し手と動作主の関係については特に述べていない。椎名・滝浦に限らず、先行研究ではこの視点について触れられていないが、「てあげる」の性質を詳細に確認するにあたって不可欠な要素である。例文(9)では話し手が動作主だが、これを「のばしてあげてください」の形にすれば動作主が聞き手に変化する。また、元の例文の場合でも、どのようなことを意図して話し手が「てあげる」を使用しているのか、使用によってどのような効果が生まれているのかは説明が不足している。「敬意の対象を持たない」ということがどのようなことなのかについても、よく考える必要があるだろう。

またこの例文について、「てやる」に替わる言葉として「てあげる」が使用されるようになったと仮定するのであれば、この文の前段階には「ピザ生地はやさしくのばしてやります」という文が想定されることになる。しかし実際には、「てあげる」「てやる」は「ピザ生地を伸ばす」という事態の描写、またその行為を説明するあるいは勧めるという表現に必須ではない。したがってこの文はもともとこの文で中にある「てやる」のぞんざいさを避けたというよりも、「のばします」「のばしてください」等、類似の場面で使用されるような表現から感じられる命令・指示のニュアンスを避けた結果であると考えられる。「てあげる」を「てやる」に代わる美化語的表現であるとだけ説明してしまうのではなく、「てやる」の美化語的表現である場合とそうでない場合を区別して考える必要がある。

⁴ 椎名・滝浦 (2021) ではこの部分に関する注釈として、謙讓語の美化語化がヤル系に限らずモラウ系でも観察されることを述べ、例文「(料理のレシピ) この料理は冷めても美味しくいただけます。」について「「いただく」で相手をへりくだらせているわけではなく、敬意漸減により美化語動詞化した「いただく」によって「食べる」を丁寧に言おうとしているだけである」としている。特に対人に使用する場合「やる」よりも「あげる」が選好されるようになっているという調査結果(文化庁「国語に関する世論調査」平成7年度調査と平成27年度調査の比較)と関連する文脈での指摘である。

なお、「てあげる」の美化語化」は、菊地（1996）でも指摘されている。例としてあげられたのは以下のような文である。これは「てやる」を丁寧と言おうとする場合の「てあげる」、つまり「てやる」の美化語的表現である。

(10) ポチを散歩に連れて行ってあげた。

(菊地 1996/2010 : 243)

滝浦や菊地の指摘では「てやる」「てあげる」という与益の表現を人間以外の相手にも使用できるようになったという点が強調されているのだと捉えるが、その点だけでなく、「連れていった」だけでもよいはずの文に授受表現が付加されるのはなぜかという問題に注目することも重要だと考える。また、その理由を考えることは、本稿で扱うような「てあげてください」表現の分析にも関連するだろう。

3. 4 村田（1994）

村田（1994）は、テレビの料理番組と化粧品の対面販売を「気になる場面」としてあげ、「(て) やる」と「(て) あげる」だけではなく、「する」と「てあげる」が対応している可能性について言及した。使用された例は以下のようなものである。

- (11) お肉が煮えたらお塩を入れてあげる。
- (12) 仕上げに胡椒もひとふりしてあげましょう。
- (13) おやすみまえに、このナイトクリームをお顔全体につけてあげてください。
- (14) 腰痛のある方は、腰をあたためてあげるようにしましょう。
- (15) もっと腰をのばしてあげると、楽になります。

(村田 1994 : 80-81)

化粧品の対面販売での発話である（14）は、「A（客）がA（客）の顔にクリームをつけてあげる」という構造になっている。村田はこのような「てあげる」について、客に対する敬意が丁寧さにすりかわっているとす。また（11）から（15）の例を通し、このような「てあげる」は、だれかに対する敬意ではなく、乱暴な感じを避ける「包装紙効果」を表すとしている。村田はこのような「包装紙効果」の「てあげる」にも授受（恩恵）の意味があるとしながら、「右の二例（注：本稿における例文（11）～（15）のこと）のような「してあげる」の用法は、乱暴な感じを避け、ことばの丁寧さをひたすら追求した結果なのだろう」とした。「てあげる」がただ丁寧な美化語的用法だとするのなら、与え手と受け手のような授受関係を重視する必要はない。たとえば「いただく」は本来「食う」「食べる」の謙譲語であるが、近年では「食う」「食べる」行為を丁寧に述べようとする場合にも用いられる。「(て) いただく」は「(て) もらう」の敬語形でもあるが、以下のような文では授受関係とそれに伴う敬意の方向が読み取れる。

(16) 先日送ってくださった桃は、家族でおいしくいただきました。

しかし「いただく」を美化語的に用いている以下のような文では、授受関係が読み取れない。謙譲語と捉えるならば、この文では話し手が聞き手をへりくだらせているかのような意味になってしまう。

(17) (野菜などについて、調理せずに) そのままでもおいしくいただけます。

この例では「いただく」は謙譲語ではなく、「食べる」の美化語的な表現として使用されており、恩恵の授受の意味は希薄、もしくは消失しているものとして考えられる。

また、もともと「食う(食ふ)」の謙譲語として使用されていた「食べる(食ぶ)」が現代では一般動詞化し、「食う」の丁寧な形として「食べる」を使用するというより、「食べる」の粗野な形が「食う」であるという認識が強まっているようである。また、それに伴い「食べる」のより丁寧な形として「いただく」も謙譲の意味を取らずに使用されることが増えてきているようだ。現在、これと同様の傾向が、「(て)やる」「(て)あげる」の関係にも見られることにも注目すべきである。

3.5 山田(2001)、(2004)

山田(2004)は、村田(1994)の例文と「包装紙効果」を引用しながら、受益者が想定されにくいテヤル受益分について述べた。「包装紙効果」を持つ用法は、無情物受益者(与益者の所有物)が擬人化された用法であり、丁寧さや思い入れを意味する。文末で用いられることが多く、そのために「てやる」との代替が基本的にできないという性質を持つとする。一方で山田が「事態改善用法」と名付けた用法は、事態をより良くする方策を述べる際に使用され、受益者の属性は不問とされる。以下に例文を挙げる。

- (18) (鼻腔の) 空気の通り道がふさがれている場合には、通り道を作ってあげれば嗅覚が戻る。
 (19) 安全な車を作ろうとすれば、車のつぶれる部分をどんどん増やしてあげればよい
 (20) (ティッシュペーパーの一枚目をうまく取り出すために) ちょっと指でおさえてやると、うまく取り出せます。
 (21) (電子レンジのエッジランナウェイという現象について) これをふせぐには、(料理の) 細かいところにアルミ箔をまいてやればOK。
 (22) (プロ野球の解説で解説者の掛布氏) バットの角度をもういちど上げてあげて打ちに行くようにします。
 (23) 行動圏の面積に生息密度を掛けてやれば、行動圏内に何匹の同種の動物が住んでいるかを計算する式が作れる。

(山田2004:79)

山田はこの二つを「その命名のレベルの違いからも分かるように、連続的であり重複する部分もあるが、基本的には文末で述べ立てとして使いうるか否かという点を基準にして分けられるもの」としている。しかし事態改善の意味は「包装紙効果」の用法にも含まれており、また述べ立てとして使いうるか否かを弁別する必要性は感じられない。山田がこのように弁別したのは、山田(2001)及び(2004)で、日本語のベネファクティブを受影者の有無によって弁別したことが背景にあると考えられる。受影者が非存在の場合の「非恩恵型テヤル」は、非過去の発話に拘束されること、意思を表すモダリティ表現化していることが示された。しかし今回の「てあげる」の分析にあたっては受影者となるヒトが想定しづらいことが前提であり、受影者がヒト以外でも想定されるか否かの弁別は有用であるものの、その他の点についてはより詳細に分析し、弁別の手法や必要性を探る必要がある。

また、山田(2001)は「(道案内で) 次の角を右に曲がっていただいて(もらって)……」とい

うような、授受動詞を丁寧語として用いるパターンとの関連も指摘している。

3. 6 井島 (1999)、山本 (2003)

井島 (1999) は、近年の「てやる」「てあげる」は授受補助動詞が本来持つ利益・恩恵の意味が薄れ、授受の相手を必要としない配慮・気配りを表す補助動詞として用いられるようになったとし、以下のような例文を挙げる。

- (24) ワンタンの面の部分を充分に、こう、冷やしてあげてですね、お肉の中まで、しっかり、冷やしてあげてください。
- (25) 酢で濡らしたふきんできれいに拭いてやるといいですよ。
- (26) (指を) こうぐっとほぐしてあげてください。
- (27) 上からしっかりと押さえてあげればわりとうまくいきますから。
- (28) 鮭は三枚におろし、骨を抜いてやります。

(井島 1999 : 32-33)

使用される場面については「あえて言えば、新しい言葉遣いに敏感な人が、他者に何とかを教えるような場面で、特に注意を喚起したいところに出てきやすい傾向があるように見受けられる」とある。新しい言葉遣いに敏感な人というのが具体的にどのような人々を指すのか不明瞭であるが、話し手の属性については井島も年齢や性別によって明瞭に区分されるものではないと言及している。このような「てあげる」の分析にあたっては、話し手の属性だけでなく、話し手と聞き手の関係に着目することも有効である。

山本 (2003) は「テアゲル」を恩恵的な意味を感じられるか否かで分類し、それぞれ「+恩恵性」「-恩恵性」と表した。「-恩恵性」の例として以下のようなものが挙げられた。

- (29) (料理番組) ここでじっくり煮込んであげると、やわらかくなります。
- (30) (ラジオで、家の手入れについて述べている) 家を長持ちさせるには、毎日風を通してやるのが大切ですね。

(山本 2003 : 156)

山本は山田 (2001) がこれらの「てあげる」を受影者非存在であり「事態改善用法」として分類したことについて、これらの文中では「料理」や「家」などのモノが影響を受けていると考えられることから、行為者と行為の受け手の関係が「てあげる」の本来持つ性質と一致すると主張する。山本の論文では触れられていないが、これは井島 (1999) の主張と対立するものである。また、井島、山本の両者は「てやる」と「てあげる」を区別せずに論を展開しているが、山田 (2004) では「てやる」「てあげる」がそれぞれ代替可能かどうかを論じている。その中で、従属節で用いられる場合は対者への配慮を必要としないため、「てやる」「てあげる」の使用に差がないと述べられるが、この点については再考の余地がある。

ここまで見てきたように、先行研究は1990年代から近年に至るまで様々であり、30年ほど経つ中で「てあげる」の使用実態も変化している可能性がある。発表年が相対的に古い研究については、ことばの変化も念頭に置きながら考察を進める必要があるだろう。特に、「てやる」との代替可能性については、「(て) あげる」の一般化が進行しつつあるという背景もあり、2020年代現在、使用者に1990年代とは違う意識が生じているとも考えられる。

4. 「てあげてください」の使用動機と使用による効果

4.1 必ずしも「てやる」を前段階としない「てあげる」

滝浦 (2021) は、「敬意漸減を起こした後の「てあげる」はもはや対上位者的な敬語ではないため、尊大化を起こして使いにくくなった「てやる」のいわば受け皿」となっていると指摘する。これは「てあげる」使用の前段階として「てやる」の使用があることを前提としているが、実際の使用状況はそのように限定されていない。前章で述べたように、「てやる」のぞんざいさを避ける「てあげる」ではなく、「てやる」を前段階としない「てあげる」が存在する。

以下にあげるのは、「てやる」の「受け皿」としての「てあげる」である。

- (31) 弟を学校まで送ってやった。
- (32) 弟を学校まで送ってあげた。

次にあげるのは、「てやる」を前段階としない「てあげる」である。

- (33) (料理について) 一煮立ちしたら、スパイスを入れてあげてください。
- (34) (料理について) 一煮立ちしたら、スパイスを入れてあげましょう。

(33) (34) の、丁寧さが劣る前段階として想定されるのは、以下のような文だろう。

- (35) (料理について) 一煮立ちしたら、スパイスを入れてください。
- (36) (料理について) 一煮立ちしたら、スパイスを入れましょう。

(35) では「てください」があるものの、補助動詞や疑問形などの緩和表現を取らないため、要求が直接的に表現されてしまう (関根 2007)。また関根 (2007) は「「てください」は依頼、指示命令、勧めの意味を兼ね備えた汎用性の表現であるが、指示・命令での使用が多いことが指摘されている」とも述べる。このような背景から、丁寧語があったとしても (35) は勧めの場面で使用されづらくなり、より柔らかい表現が指向されているのだと考えられる。(36) は (35) に比べ、「てください」がない分行為指示の力が弱く、多少受け入れられやすい表現に思われる。しかし聞き手の意思にかかわらず行為を勧めているという点で、聞き手のネガティブ・フェイスを侵害する可能性がある。

4.2 ポライトネス・ストラテジーとしての機能

「てあげる」を用いた「てあげてください」は、直接的に行為指示を表す一方で、聞き手とモノとの間に授受関係を想定することによって、話し手と聞き手の間にある指示／被指示の関係の印象を弱め、行為指示によって侵害した聞き手のフェイスに対する補償行為としてはたらいいていると言える。つまり、この「てあげる」は授受関係における与益者が上位、受益者が下位におかれるという上下関係を意識して使用されていると考えられる。

なお、山田 (2004) で「事態改善用法」として挙げられているような文は、直接的な行為指示ではないという点が重要である。このような場合の「てあげる」は、聞き手のフェイスに配慮するポライトネス・ストラテジーではなく、話し手自身の良い品行の表象としてのはたらきをしていると説明できるだろう。

蒲谷 (1998) は、「〈「敬語表現」⁵をしようとする気持ちがあること〉と、「尊敬の気持ち」とか「謙りの気持ち」などを持っている」ということとは、少し違います。「尊敬の気持ち」とか「謙りの気持ち」などの「敬意」を持っていなくても、「敬語表現」は成立するからです。もちろん「敬意」のこもった「敬意表現」もありますが、例えば接客業などにおける「敬語表現」などは、「敬意」とはやや異なった意識に基づく「敬語表現」であることが多いと言えるでしょう」と述べる。Leech (2014) がポライトネス研究において内的感情を関心の外としたことも、これと似た主張と言える。相手に対してポライトな振る舞いをするところからは「ポライトな振る舞いをしようとしている」ということだけがわかるのである。

また、滝浦 (2008) は、敬語は遠隔化的な方向性においてネガティブ・ポライトネスの表現手段となると述べる。「表敬」よりも「品行」の表象となる表現が選好されるようになってきている⁶という椎名・滝浦 (2021) の指摘とも関連するが、近年の敬語・敬意表現の傾向として、相手からできるだけ遠ざかって述べようとする、また相手への敬意よりも自身の品位を表そうとするというものがある。相手からできるだけ遠ざかろうとする傾向は、敬語・敬意表現がネガティブ・ポライトネスの表現手段であることがより強く反映されるようになってきたことによるものと考えられる。相手から離れることが望ましいとされる流れの中で、相手にフォーカスする「ください」よりも、自分にフォーカスする「いただく」が選好されるようになってきていることも、椎名 (2021) で指摘されている。

これらに対し、相手にフォーカスして述べる「てあげる」の使用が広がっている現象は、一見すると近年の敬語・敬意表現の傾向に逆行しているかのように思われる。しかし命令・指示、依頼、勧めという場面は基本的に相手から離れて述べるのが困難⁷である。「てあげる」は自分の良い品行を表すと同時に聞き手のフェイスに対して配慮することができる。また「てください」等の指示、勧めを表す他表現に加えることで、直接的な印象を緩和する目的でも使用可能である。そのような性質を持つ「てあげる」が好まれるようになってきていることは、敬語・敬意表現全体の傾向から見ても、それほど不自然ではないと言えるだろう。

⁵ 蒲谷 (1998) は「「敬語表現」という考え方は、専門的には「待遇表現」という考え方、すなわち〈「人間関係」や「場」に対する「表現主体」(話し手・書き手)の配慮に基づく表現〉として「敬語」を扱うという発想に基づいています」として「敬語表現」という用語を使用している。

⁶ 椎名・滝浦の「表敬」「品行」の用語の使い方については本稿では詳しく取り上げないが、Goffman (1967) のものとは多少異なっているため注意が必要である。たとえば椎名・滝浦は日本語の敬語のうち尊敬語を「表敬」、謙譲語を「品行」の表現としているようだが、これは必ずしも正しいとは言えない。「品行」は自身が周囲にとって望ましいもしくは望ましくない性質を持っていることを周囲に示す行動であり、相手に敬語を使用する、ということ自体が基本的に良い品行の表象となる。椎名・滝浦は表敬を外向き、品行を内向きの敬意表現というニュアンスで使用しているように思われるが、少なくとも Goffman の言う表敬 (deference) と品行 (demeanor) はそのような関係ではない。

⁷ 例えば、「私はここで塩を入れることが効果的だと思います」のように間接的に勧めるような言い方も考えられるが、直接指示を出したり勧めたりするのであれば、やはり相手の動作に触れざるを得ない。山田 (2004) で「事態改善用法」とされていたような用法は相手に触れずに事態改善の方策を述べるような表現であるが、これも 4. 2 冒頭で述べたように聞き手のフェイスに向けた表現ではなく話し手自身の良い品行の表象としてはたらきが強いいため、相手に配慮していることを積極的に伝えたい場面では聞き手への意識が不足していると捉えられる可能性がある。

「てあげてください」の使用動機の説明には、ポライトネス理論の観点からの分析が有効である。「てください」は行為指示表現であり、指示される側となる聞き手のフェイスを侵害する。また、相手のフェイスを侵害するような行動をとったという点で、話し手の「悪い品行」の表象ともなりえる。これに対し「てあげる」が付加されている場合、行為指示によって侵害した聞き手のフェイスを補償するというだけでなく、モノに与益するような表現を用いることによる、モノを丁寧に扱うという話し手の「良い品行」、そして聞き手の動作主としての「良い品行」を表すことができる。この「品行」の観点からの分析については別稿を要する⁸が、必ずしも「てやる」が前段階として想定されない「てあげる」の機能を考える際には、今回取り上げたような、行為要求の文脈で使用される例が糸口となると考える。

5. まとめ

以上、授受補助動詞「てあげる」のうち、主にデモンストレーションの場面における行為指示で使用される「てあげてください」という用法についての先行研究をまとめてきた。

これまでの先行研究では、「てあげる」という授受補助動詞が必須でない場面で「てあげる」が付加された表現が使用される動機について、美化語的、つまり話し手が自身の丁寧さを伝えるためのものであるという指摘が中心になっていた。本稿では、特に「てあげてください」という行為指示の表現においては動作主が聞き手になるということに注目すると、さらに新たな説明を加えることができることを主張した。行為指示表現においては動作主が聞き手になるため、その動作を表す表現に付加される「てあげる」は、行為指示によって侵害した聞き手のネガティブ・フェイスに対する配慮を示す機能を持つ。行為指示表現「てください」によって損傷した相手のフェイスを「てあげる」の挿入によって補償するとすれば、先行研究のように自分本位なだけの表現としてではなく、聞き手に対する配慮も伴った表現であると言える。また、話し手自身の丁寧さを表す、という先行研究の指摘についても、「品行」概念から捉え直せば、行為指示を行う話し手自身と、指示によって動作主となる聞き手双方の良い品行の表象と説明することもできることを示した。

「品行」概念を用いて「てあげてください」の使用動機と効果を説明するにあたっては、B & L (1987) のポライトネス理論だけでなく、Goffman (1967) の「表敬 (deference)」、「品行 (demeanor)」の概念に立ち返った分析が有効となる。B & L のポライトネス理論は Goffman のフェイス概念を利用しているものの、品行概念が受け継がれていない。今回取り上げた「てあげてください」という逸脱的な表現も含めた現代日本語の待遇表現についての分析は、ポライトネス理論の見直しと相互的に有用になるだろう。

参考文献

- Brown, P and S. C. Levinson (1987) *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge: Cambridge University Press. (田中典子 (監訳) (2011) 『ポライトネス：言語使用における、ある普遍現象』 研究社.)

⁸ B & L (1987) のポライトネス理論は、Goffman (1967) のフェイス概念や儀礼的行為としての「表敬」概念を利用しているが、Goffman が表敬と相補的關係にあるとした「品行」については引き継いでいないという問題がある。そのため、「品行」の表象となる表現を分析するにあたっては、同時に、品行概念を取り入れたポライトネス理論の再考を試みる必要がある。

- Goffman, Erving (1967) *Interaction Ritual: Essays on Face-to-Face Behavior*. New York: Anchor Books/ New York: Pantheon Books (浅野敏夫 (訳) (2002) 『儀礼としての相互行為：対面行動の社会学』〈新訳版〉(叢書・ユニベルシタス 198) 法政大学出版局)
- Leech, Geoffrey (2014) *The Pragmatics of Politeness*. Oxford: Oxford University Press (田中典子・熊野真理・斉藤早智子・鈴木卓・津留崎毅 (訳) 『ポライトネスの語用論』研究社.)
- 井島正博 (1999) 「魚は三枚におろしてあげます —〈配慮・気配り〉を表すテヤル・テアゲル」『日本語学』18 (12) 32-35 (明治書院)
- 荻野千砂子 (2020) 「近世前期の授与動詞の諸相 トラス、アゲルを中心に」『日本語語用論フォーラム』3 105-134 (ひつじ書房)
- 蒲谷宏・川口義一・坂本恵 (1998) 『敬語表現』(大修館書店)
- 菊地康人 (2010) 『敬語再入門』(講談社学術文庫) ※初版は丸善ライブラリーより 1996 年、一部改訂のうえ文庫化
- 佐久間鼎 (1983) 『現代日本語の表現と語法』(くろしお出版) ※初版は厚生閣より 1936 年
- 椎名美智 (2021) 『させていただくの語用論』(ひつじ書房)
- 椎名美智・滝浦真人 (2021) 「薄幸のベネファクティブ「てさしあげる」のストーリー —敬意漸減と敬意のナルシシズム—」『動的語用論の構築へ向けて』3 204-240 (開拓社)
- 関根和枝 (2007) 「「～てください」の機能について：「～てください」は依頼か」『昭和女子大学大学院言語教育・コミュニケーション研究』2 81-95 (昭和女子大学)
- 滝浦真人 (2008) 『ポライトネス入門』(研究社)
- (2020a) 「「ポライトネスの原理・原則」と日本語ベネファクティブの敬意漸減」『日本語語用論フォーラム』3 75-104 (ひつじ書房)
- (2020b) 『日本語学入門』(放送大学教育振興会)
- 橋元良明 (2001) 「授受表現の語用論」『月刊言語』30 (5) 46-51 (大修館書店)
- 前田富禧 (2001) 「「あげる」「くれる」成立の謎 —「やる」「くださる」などとの関わりで」『月刊言語』30 (5) p.34-40 (大修館書店)
- 村田美穂子 (1994) 「「やる・してやる」と「あげる・してあげる」」『国文学 解釈と研究』59 (7) 77-84 (至文堂)
- 山田敏弘 (2001) 「日本語におけるベネファクティブの記述的研究 第6回 非恩恵型ベネファクティブ」『日本語学』20 (4) 90-100 (明治書院)
- (2004) 『日本語のベネファクティブ —「てやる」「てくれる」「てもらう」の文法—』(明治書院)
- 山本裕子 (2003) 「「テアゲル」の対人的な機能についての一考察」日本語教育論集『世界の日本語教育』13 143-160 (国際交流基金日本語国際センター)
- 文化庁文化語部国語課 (1995) 『国語に関する世論調査』大蔵省印刷局.
- 文化庁文化語部国語課 (2016) 『国語に関する世論調査』ぎょうせい.
- NHK 放送文化研究所 「最近気になる放送用語「～してあげる？」」(<https://www.nhk.or.jp/bunken/summary/kotoba/term/150.html>) (2012.03.01) (2023.10.15 最終閲覧)

(カズノウ フウカ・北海道大学文学院・修士課程2年)